空虚なる良心についての空虚なる研究

—— *Roger Malvin's Burial* 再考 ——

鵜 木 奎 治 郎

I

N. Hawthorne の *Roger Malvin's Burial* は難解な作品である。実際上の主人公である Reuben Bourne が，戦場で傷ついた，やがて義父になる運命にあった Roger Malvin を死ぬにまかせておきざりにした Reuben の物語りなのである。その事実を，Roger の娘 Dorcas に遂につげることができなかった Reuben の物語りなのである。Dorcas と不幸な結婚生活の後，18年後に再び Roger Malvin をおきざりにした荒野を訪れて，今や唯一の宝であり，彼自身の分身でもあった Cyrus を鹿とまちがえて誤殺し，始めて贖罪した様な気持になり，気も晴々となった Reuben の物語りなのである。之は要するにすべて Reuben の物語りであり，従って Reuben の罪の意識の物語りである。

キリスト教的な意識が失われかけて行く現代のアメリカにあって，精神分析学の流行するアメリカにあって，陸続と Reuben の心理を克明にたどって見せる研究者が登場してきたのはむしろ，当然のことである。曰く「今迄の研究は Reuben の罪の意識と，彼に実際に罪があるという事実との差に気付いていない。」(Crews[1])；曰く，「Jung と Freud の宣告をまって，この気狂いじみた良心に指示された自虐的な贖罪意識をはっきり説明できる。」(Stein[2])；曰く，「humanity から疎外された，孤独な魂の物語。」(Bell[3])。何も現代の批評家にとどまらず，Hawthorne と同時代の批評家でも，或いは「Egotism を描いた系列の作品としては最良。」(Unsigned[4])，或いは「勇気のない人間が見せかけの罪に怯えた話。」(Hutton[5]) と殆んど同様のことを指摘しており，人間の批評意識がそう革新的に変るものではないことを思い知らされる。

もう一つの読方は典型的な Christianity の宗教文学として読むことであり，私の見るところでは，この傾向は現代にあってはいささか希薄になっているとの感は否めない。とても1851年に Mayo が宣告した様に「この作品は *Birth-mark* や *Rappaccini's Daughter* と同様に作者の心の弱点を描写したものであって，之等の作品が *The Celestial Railroad* や *Drowne's Wooden Image* の様な名作と共に，同じ一冊の本に収められている事はもって憎むに足る[6]。」迄言いきる批評家はいない。せいぜい「Reuben は Aylmer が完全主義の idea にとりつかれていたのと同様に，罪の意識を完全に成長させることにとりつかれていたのである。」(Martin[7]) と述べるのが精一杯の所である。ただ，Waggoner だけは，比較的脚光を浴びていない此の作品を詳細に論じているが，それでも結論としては，「心理的な読方と宗教的次元の読方が共に可能である。」(a reading of the tale in terms of both primitive religious myth and the historical and the theological aspects of creedal Christianity are as clearly justified as the psychological reading is.[8]) と言うだけでは，何となく焦点を巧みに外された様な気がする。彼が呈示して見せる分析は，何れもこの二つの見地

に立った，あまりにも鮮やかすぎる分析である。「心理学者なら Reuben は洞察力（insight）を欠いだと言うであろうし，神学者なら Dimmesdale と同様に，極めて微妙な，殆んど無意識といってよい自負心（pride）から生じた怯懦と無分別の人であると言うであろう[9]。」と述べて，この作品に充満する symbol を手際よく分析してみせる。実際 symbol の使い方についての教材にしてもよいと思われる程，この作品は symbol に満ちているので，その分析を読まされても，あまり当り前すぎて，あと一つ感銘する所が無い。「この作品のすべての意味はすべて構造（structure）——つまり情況と性格と行為，或いは行為への動起及びその結果——によって規定されている。Hawthorne の後期の諸作品の傑作程，肌理（texture）細くもないし，又その意味が imagery を含めて style によっても規正されることもない[8]。」と迄断定されると，首をかしげたくもなる。

果して上の二つの読み方以外の読み方はできないものであろうか。結果としては，そうならざるを得ないかもしれないが，私は Waggoner が殆んど，無視した texture や style の点に於て，この作品は，分析不能と言える程肌理細かな作品であると思うのである。はっきりとした Reuben の心理的或いは神学的分析を拒絶している作品であると思うのである。それでは所謂曖昧かというと，決してそうではない。微妙な点に迄この短篇は書き尽くしてあり，書いてあること自体は決して曖昧ではない。たゞ，所謂 Hawthorne の ambiguity という問題が俎上に上る時，何時でもそれは分析されることに挑戦しているのであり，分析をしてみせることが批評家の義務であると我々が考えているとしたら，之こそ問題のある態度ではあるまいか。分析不能の問題もある筈であり，いや大部分の文学作品はもとより我々の日常生活そのものが，我々が説明に窮する事態の方がはるかに多いのではなかろうか。私は決して分析することを回避しているのではない。分析ができないと迄は言わずとも，分析が殆んど不可能と思える程，微妙な作品であるとは主張するつもりである。つまりひょっとしたら決定的分析は不可能であると言う分析も成立しうるのではなかろうか。この作品がそういう主題をとりあつかっていたら，まさにその分析不可能性が人間の実態であるが故に，この作品は人間の本質に触れた偉大な作品であると言うことができよう。

II

私は，従って，此の小論に於ては，全く今迄の批評家とは違った分析を試みる。私は何も Reuben を，特に怯懦な卑怯者だとは思わない。少くとも精神分析学的論文の好餌になる程の，精神病質の人間であるとは思わない。彼がもし怯懦か，或いは卑怯な人間であるとすれば，それはおそらく，今この小論を書いている私が，拙論を読んで下さる読者が怯懦で卑怯である程度に怯懦で卑怯であるにすぎない。従って Reuben Bourne の問題は，何も 'Reuben Bourne' という特殊な人間の物語りではなくて，我々一般の人間の，心の微妙なひだを，間隙を扱ったものであると考える。従って，この作品に価値があるとすれば，それは Reuben 一人のみならず，ひろく人間性一般を扱っているからである。

そこで私はこの作品を分析するに当って，一つの前提をたてることにする。所謂この作品において表明された明と暗の symbol の使いわけは，既に云いつくされたことでもある[10]。或いは，Emersom 流に自然と倫理の correspondence を想定して又て，the oak, the pine, the wilderness とReuben の行為との対応を考えることも既に云いつくされたことである[11]。

私の前提とは，登場してくる人間が，ごく普通の一般の人間の代表として登場してくると云うことに他ならぬ。だから，登場人物は誰も大したことは言っていないのである。英雄，偉人の類は誰もいないのである。この作品は，対話が大きな主題となっている。我々が対話をかわす時，果して我々は話すことの内容そのものについて，その意味について，深い責任感を感じて話すであろうか。我々が記憶しているのは，その対話の際の印象だけであり，雰囲気だけであり，その結果我々が愉快になったか不愉快になったかの莫然たる記憶だけである。対話の内容そのものはきれいさっぱり忘れてしまっている。

そういう着眼点に立って，この作品に表れた対話を分析してみる。つまり，無内容な対話そのものではなくて，対話がかわされた時の雰囲気だけを分析するのであるから，対話の内容は，すべて無視することにする。というのは，この作品は Reuben の良心の苦悩を取り扱ったものであることは間違いないであろう。だが良心は，概念規定や語義の分析によってその本質を解明することはできない。心理学的分析や神学的分析によってその本質はあらわにされることはない。それを裁断しうる絶対的基準はどこにもない。だが，その本質は諒解できなくても，その良心が苦悩し，過去を悔い，他者との或いは絶対者との和解へと自らを更生させる経過なら，その人の行動で外側から観察できる。もとより，他人の意識にたちいることは不可能ではあるが，その微妙な振幅を，外側から観察できる程度に於て観察できる。それを私はこの作品の対話の様式に求めるのである。

対話はこの作品で重大な要素を占める。殆んど対話だけで成立していると思われる程であり，地の部分は作品の情況描写にあてられるのみである。

対話は4組にわたって考えることができる。(**A**) 荒野に Roger がおきざりにされる時にかわされた，Roger と Reuben との対話。之は全部で15回にわたる。(**B**) 故郷にたどりついた Reuben が Roger の娘である Dorcas とかわす会話。之は3回にわたる。だが18年間の失意の生活の後で，今は妻となった Dorcas と，一子 Cyrus 共々に破産して，荒野を流浪して歩く catastrophe に於ては4回であり，合計7回になる。(**C**) Reuben と一子 Cyrus との間の対話が皆無であるということは深刻である。之は Reuben と Cyrus が identify されている，少くともそういう意識を Reuben だけは持っていたからであろう。(**D**) 同じく Dorcas と Cyrus の間の対話もない。強いていうと catastrophe に於て Dorcas は2度呼びかけるが，勿論父 Reuben に誤殺（？）された Cyrus は答えるすべがあろう筈もない。

先に述べた様に，対話の内容そのものは無視してかかる。非難の声が上ることは承知しているが，私から見ると，この作品は，道具立てはあまりにもよくできすぎていて，最初から，或る程度結末は予測されているといってもよいと思われる程である。繰り返すがその過程に生じた人間の対話の様態に，人間の心の隠された襞が表れていると思われ，そこに私の興味は集中しているのである。もとより，もしこの作品の中に書かれている通りのことが，現実に起ったとしたら，実際に対話者同志が交した回数は，上記の(**A**)～(**D**)で示された集計より遙かに多かったことであろうが，Hawthorne が作者として意識的抽出を行ったのであるから，それに素直に従うべきである。又，直接話法の対話に原則として限ることとした。たゞ対話の進行上，極めて必要と認められ且つ直接話法の形式では表現されていなくても明かに対話が交されたことが，作者の地の文に於て明瞭な場合は，之も追加することになる。(この場合は CAPITAL LETTERS で表示しておく。) 又，意識内容をすべて無意味なものとして捨象して，その対話の様態だけを，つまり Kenneth Burke 的に言えば，symbolic action

として対話を抽出したのであるから，私は，行動としての対話を考える時，受け答えの動詞が最も重大となると考える。従って原則として動詞及びそれに附随する状況の説明文のみを抽出することにする。

A (Reuben と Roger との対話)

A	1	2	3	4
Roger	*SHOCK HIS HEAD* (*SILENCE*)	said	said calmly	rejoined
Malvin	TO MAKE ANXIOUS INQUIRIES RESPECTING THE CONDITIONS OF HIS WOUNDED FELLOW TRAVELLER	replied	said resolutely	exclaimed

5	6	7
replied=spoke the last few words in a faltering voice	interrupted	(1) said (2) spoke=the energy of his concluding words seemed to fill the wild and lonely forest with a vision of happiness
exclaimed	exclaimed	*felt as if it were both sin and folly to think of happiness at such a moment* (*silence*)

8	9
(1) resumed (2) *a mournful smile strayed* across the features of the dying man as he insinuated that unfounded hope (*silence*)	replied —— sighing, however, as he secretely acknowledged the wide dissimilarity between the two cases
(1) said, half aloud (2) added, indistrust of his own motives	asked Reuben, hanging on Malvin's words as if they were to be prophetic of his own success

10	11
answered	said
this example, powerful in affecting Reuben's decission, was aided, unconciously to himself, by the hidden strength of many another motive (*silence*)	*half convinced that he was acting rightly* (*silence*)

12	13
(1) suggested much and minute advice (2) spoke with calm earnestness (3) HIS FIRMNESS WAS SHAKEN BEFORE HE CONCLUDED.	addded, as the weakness of morality made its way at last
(*silence*)	*felt the full importance of the promise* (*silence*)

14	15
said	(1) said he faintly (2) was his last request (3) Roger Malvin's hands were uplifted in a fervent prayer, some of the words of which stole through the stillness of the woods and entered Reuben's heart
pressed his hand in silence (silence)	(1) *felt (silence)* (2) *gave a parting look (silence)*

B (Reuben と Dorcasとの対話)

B-1 Reubenが生還した直後

B—1	1	2	3
Dorcas	she began, but the change in her lover's countenance made her pause	exclaimed Dorcas, faintly	was the question by which her filial piety manifested itself
Reuben	(1) he half raised himself and spoke vehemently, *defending himself against an imagery accusation* (2) *and"——(silence)*	*spoke not (silence)*	*replied the youth in a smothered tone (nearly silence)*

B—2 18年後の事件の際

B—2	4	5
Dorcas	mentioned	addressed him in that mournful tone which the tender heart appropriate to griefs long cold and dead
Reuben	(1) started (2) *muttered (nearly silence)*	*said Reuben, in a broken voice (nearly silence)*

6	7
exclaimed, laughing cheerfully	"For the love of Heaven, Reuben, speak to me!" cried Dorcas
he stirred not, neither did he turn his eyes towards her (silence)	(1) *started, stared into her face (silence)* (2) said

C (Reuben と Cyrus との対話)

C	0
Cyrus	*(silence)*
Reuben	*(silence)*

D (Dorcas と Cyrus との対話)

D	1	2
Dorcas	exclaimed	she sent her cheerful voice among the trees in search of him
Cyrus	(*silence*)	(*silence*)

繰り返して云うが，対話と云っても，Platon 的な賢者の対話を予想してはならない。Platon の『対話篇』に描かれた哲学者達は，対話を重ねることによって，益々知慧が啓発されていくのであった。しかし *Roger Malvin's Burial* という『対話篇』では，対話を重ねることによって益々人間の惨めさが露呈されていくのである。

先ずAに就いて検討する。回を重ねるに従って，Reuben の回答には *silence* が増加していくことが表より明かである。しかも15回の対話に於て，Reuben の方から口火を切ったのは第1回目に Roger の負傷の程度を尋ねた時だけであつて，あとの14回はすべて負傷し，死を直前にし，同情を受けるべき運命にある Roger の方から話しかけていることがわかる。沈黙の意味は，勿論 Reuben の孤疑逡巡の性格を物語るわけであるが，それは単に Reuben に何も語るべきことがなかったからというわけではない。かって Christ が刑場にひかれた時，Peter が沈黙を守りえなかったのは，沈黙することの方が，雄弁に答えるよりももっと雄弁に答えることになる，つまり自分の不利になるということを意識していたからである。今回は現象形態は逆であって，Reuben は沈黙を守るのであるが，意識内容としては Peter と五十歩百歩で，その方が自分にとって好都合であることを本能的に意識していたからに他ならない。

Bの Dorcas と Reuben の対話に於ても，Dorcas の方から先に発言し，Reuben は沈黙を守ることが多い。特に Reuben のB－1－(2)に於ける沈黙は，この作品の中で最も重大な意味を持つ沈黙であって，之はどんなに弁解しようとしても，そのすべもない。Cの Cyrus と Reuben の間に18年間対話が皆無であったこと，又Bの Dorcas と Reuben の間にも18年間対話が皆無であったことも注目に値する。

更に補完的な調査として各登場人物の性格を物語る語彙を収集して本章を終えることにする。(この調査では対話の内容そのものも対象とされる。)

Roger の泰然とした性格を物語る言葉

the deep lines of his countenance, his muscular frame, his own conviction, an old hunter's grave stone, there is a surer support than that of earthly friends (=God), my blessing is with you both, generous art, I deceive myself in regard to the time I have to live (=I might recover of my wound).

Rogerの悲痛な気持を物語る言葉

the desparing glance, your last moments will need comfort far more than mine, worldly sorrows, a mournful smile.

Reuben の夢想癖を物語る言葉

the violent action of his features, a vision, his dreaming fancy, with a vision of happiness, to think of happiness at such a moment, his sanguine nature, Reuben's recollection strayed drowsily, he was incapable of returning definite answers, the fear of

losing her affection, the dread of universal scorn, a certain association of ideas, he has not power to banish from his mind, haunting and torturing fancy, a sad and downcast yet irritable man, a neglectful husband, the irritability, innumerable lawsuits, a moody man and misanthropic because unhappy, the enthusiasm of a daydream, the dreamer's land of fantasy, an outward gladness, he seemed ill at ease, as if in fear of some pursuer, her husband's wayward moods, convinced by a patial observation, a supernatural voice had called him onward.

Reuben の罪の意識を物語る言葉

selfish feeling, both sin and folly to think of happiness at such a moment, in distrust of his own motives, the hidden strength of many another motive, a sort of guilty feeling, their most justifiable acts, conscience or something in its similitude, a desperate effort, an imagery accusation, an incommunicable thought, the moral cowardice, inwardly there was a cold sorrow, into the sepulcher of his heart.

Dorcas の明るい性格を物語る言葉

one fair and gentle being, the heart of Dorcas was not sad, her cheerful voice, singing as she went, laughing with the sportive mischief that is born of affection, her expecting fancy.

Cyrus の一見 Reuben と似ているが，本質的に異る性格を物語る言葉

he was peculiarly qualified for, and already began to excel in, the wild accomplishments of frontier life; a future leader in the land; his adventurous nature.

以上の調査より明かになったことは，作者は Reuben が元来明るい性格の持主だったことに多くの説明を要していることであり，それが独持の不運に見まわれた為に，孤独の生涯を送るようになったということである。又，Reuben は一子 Cyrus を自己と identify しているが，前者がどちらかというと空想癖乃至無想癖の強い性格だったのに対し，Cyrus は活動的な pragmatic な性格であったということも判明する。

Ⅲ

私は今，Reuben に夢想癖が見られることをこの作品に使われた用語より指摘したつもりである。そう言えば，この作品自体は，一種の夢物語りともいえるのではなかろうか。

先ず冒頭にあるのは，「この物語は Indian との戦いで romance の月光を素直に想定できる数少い事例の一つ(12)」と述べている但し書きでもって，はたして現実の話であったかどうかに先ず一抹の疑惑の念を抱かせられる。そして事件が，Roger と Reuben が共に負傷しているという形で生起していた時，最初に眼を覚ましたのは，いや，この作品の初めから，既にひどい負傷の為眠れないでいたのは，やがて荒野で死ぬ運命にあった年上の Roger であった。

He next turned his eyes to the companion who reclined by his side. *The youth*—for he had scareely attained the years of manhood—*lay*, with his head upon his arm, *in the embrace of an unquiet sleep*, (*italic* mine) which a thrill of pain from his wounds

seemed each moment on the point of breaking. His right hand grasped a musket; and, to judge from the violent action of his features, his slumbers were bringing back a vision of the conflict of which he was one of the few survivors.(13)

つまり悪夢をみていたのであり，それからまさに覚醒しようとしていたのである。この時覚醒してから——といっても完全な覚醒ではなく，白昼夢の状態であるが——18年の遍歴の後で，かって自らが Roger をおきざりにした場所に，我知らずたどりついて，一子 Cyrus を鹿と誤って（？）殺した時，茫然と立ちすくむ Reuben に Dorcas は何と云ったか。

"How is this Reuben? Have you slain the deer and *fallen asleep over him?*"(14)

つまり再び象徴的に言うと Reuben は睡ってしまったことになる。もう一度この図式をくりかえすと，負傷して眠って悪夢を見ていた——それから半ば覚醒して，白昼夢を見る期間が18年も続いた——最後に贖罪（と Reuben の信じている）の行為が行われて彼は再び睡眠にはいった。Reuben は今度はそれが覚醒時に行われた正しい贖罪であると信じこんでいる様子であるが，Hawthorne がまことしやかに表現したからといって，読者である我々がその通りだと信じこまねばならぬ理由はどこにもない。それどころか Hawthorne は又彼が睡ったように見えると表現しているのである。大体 ambiguous である筈の Hawthorne の作品をとりあげて，この贖罪の場面だけが ambiguous でないと信ずることは，私にはとてもできない。この作品が *the Token* に，彼が *The Gentle Boy*, *The Wives of the Dead*, *My Kinsman*, *Major Molineaux* と共に発表されたのは1832年のことであり，製作されたのはもっと早く1825年9月(15) とも推定されている。ところが丁度この時，即ち1825年9月に *The Haunted Mind* なる essay をも彼は物にしている(15) という説もある。その中で，彼は朝起きる時の，まだ夢がさめきっているのでもなく，といってはっきりと目覚めているのでもない，中間の覚醒の瞬間をこよなく愛して次の様に述べているのである。

What a singular moment is the first one, when you have hardly begun to recollect yourself, after stating from midnight slumber? By unclosing your eyes so suddenly, you seem to have surprised the personages of your dream in full convocation round your bed, and catch one broad glance at them before they can flit into obscurity. Or, to vary the metaphor, you find yourself, for a single instant, wide awake in that realm of illusions, whither sleep has been the passport, and behold its ghostly inhabitants and wondrous scenery, *with a perception of their strangeness such as you never attain while the dream is undisturbed.*(16).....

The moment of rising belongs to another period of time, and appears so distant that plunge out of a warm bed into the frosty air cannot yet be anticipated with dismay. Yesterday has already vanished among the shadows of the past; to-morrow has not yet emerged from the future. *You have found an intermediate space, where the business of life does not intrude; where the passing moment lingers, and becomes truly the present; a spot where Father Time, when he thinks nobody is*

watching him, sits down by the wayside to take breath. O, that he would fall asleep, and let mortals live on without growing older. (17)

ここで Hawthorne が述べていることは，この半睡半醒の時こそ，人間が物を一番よく直視し，物の本質を洞察するにふさわしい幸福な瞬間であるというのである。夢を見て眠っている時よりも，夢を見ず起きて仕事をしている時よりも幸福な一瞬であるというのである。そして少しでもその一瞬が長からんことをこい願う。この図式を *Roger Malvin's Burial* にあてはめてみよう。彼は戦場で眠りからさめ，半睡半醒の，Hawthorne の定義によれば幸福であるべき白昼夢の時間を18年もすごし，そして又作品の指示するところによれば，再び眠ってしまったのであった。ところが，その幸福であるべきの筈の白昼夢の18年間は，実際は不幸そのものの悔恨の連続であり，Dorcas の眼からみたら再び眠ったと見えたのに，本人は目覚めて，あっぱれ贖罪をはたしたつもりでいるのであった。ここに作者の皮肉があると同時に，人間性の本質についての不気味な迄の洞察がある。

即ち，*The Haunted Mind* に描かれた様な半睡半醒の幸福な瞬間は，現実の人間には無いということを指摘したのであり，少くともそういう見方でみる時，catastrophe の贖罪の場がまことに不自然に見えると同時に，それ以上に，たえず半睡半醒の不幸な白昼夢を見ずにはおれない，不幸な人間の姿，原罪があることをおぼろげながら自覚しえたにしても，それを実体として，どこに確認して（その結果，Aylmer のような原罪除去の儀式を想定しているのであろうが），安心立命の境地に至りうるかを混沌としきった状況で模索している，そういう人間像を描いていると思うのである。Aylmer はとにかく原罪の実体的表象として，birthmark を発見しえたが，それすらも発見できず，多分この作品で birthmark の代りをつとめたものは Cyrus であろうが，それを誤殺して，つまり birthmark を除去しえて実は神に反逆したのに，おめでたくも贖罪をなしえたと思わせる点に，この作品の現代的な悲惨な意義があり，所謂精神分析的乃至宗教主義的読み方とは異った単に明暗とか自然と倫理の一致などという即物的な象徴に終らぬ，より深い別な象徴的読み方の一つがあると思うのである。つまり事実上は埋葬されなかったのに，*Roger Malvin's Burial* と表題が与えられているのは，Reuben の良心が埋葬されたと解釈した時，始めて意味が明かになると云えよう。

註

(1) Frederick C. Crews, "The Logic of Compulsion," *The Sins of the Fathers* (Oxford Univ. Press, 1966) p. 82. 尚その他 Harry Levin, Mark Van Doren, Arlin Tuner の説も紹介している。

(2) William Bysshe Stein, *Hawthorne's Faust* (Anchon Books, 1968) p. 7.

(3) Millicent Bell, *Hawthorne's View of the Artist* (State Univ. of New York, 1962) p. 24.

(4) "A British view of Hawthorne and an authentic American liteature, from an unsigned essay, 'Nathaniel Hawthorne'" in the *Universal Review*, *Hawthorne: The Critical Heritage*, ed. by J Donald Crowley (Poutledge & Kegan Paul Limited, 1970) p. 360.

(5) Richard Hold Hutton; "Hawthorne and the Calvinist imagination, from an unsigned essay 'Nathaniel Hawthorne'", in the *National Review*, *ibid.*, p. 370.

(6) Amory Dwight Mayo, "Hawthorne as a religious novelist, from 'The Works of Na-

thaniel Hawthorne", in the *Universalist Quarterly, ibid.*, p.222.

(7) Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (Twayne Publishers, Inc., 1965) p.79.

(8) Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne* (The Belknap Press, 1963) p.98.

(9) *Ibid.*, p.97.

(10) 例えば Leland Schubet, *Hawthorne, the Artist: Fine-Art Devices in Fiction* (Russell & Russell, 1963) p.61, p.64, pp.80—82.

(11) 之も前掲の Waggoner の論文に委しい。

(12) Nathaniel Hawthorne, "Roger Malvin's Burial", *The Complete Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (Hanover House, 1959) p.376,

(13) *Ibid.*, p. 377.

(14) *Ibid.*, p.388.

(15) Elizabeth Lathrop Chandler, *A Study of the Sources of the Tales and Romances Written by Nathaniel Hawthorne before* 1853 (The Folcroft Press, Inc., 1969) p.55, p.57.

(16) Nathaniel Hawthorne, "The Haunted Mind", *Selected Tales & Sketches*, introduction by Hyatt H. Waggoner (Reinehart & Company, Inco., 1950) p. 321.

(17) *Ibid.*, pp. 321—322.

なお，本稿で引用した研究書は，その必要性から勘案して，適当に短縮して大意のみにとどめてあるので，正確な翻訳ではない。又，本稿は既に発表した『Reuben Bourne の雄弁と沈黙』（名古屋市立保育短期大学研究紀要，7号，1968）とほぼ同じ主旨であるが，材料の取り扱い方は全然異っていて，symbolism の指摘も更に深化せしめた。又，対話の回数の数え方が，今回の小論の方がより細くなり，それだけ回数もふえている。

Summary

A Study of Reuben Bourne's Worthless Redemption

Keijiro UNOKI

We have already encountered many interpretations of Nathaniel Hawthorne's *Roger Malvin's Burial*, but these can be divided only in two categories. One of them is a psychological interpretation and the other a religious one. Both interpretations seem to have the same premise that other interpretations, if any, might be possible, they would surely be reduced to one of these interpretations. My thesis is, so to speak, the third interpretation of this ambiguous romance. The most important personality in this romance is undoubtedly Reuben Bourne himself, whose timid cowardice is well expressed in his conversation with other three characters. But the cream of his conversation with others is not so much in the contents of that conversation but in his suppressed attitudes when he converses with others. I having paid my attention only to Reuben's direct narrative style, Reuben's timid character discloses itself. Whenever it is not convenient to Reuben, he tends toward *silence*. This tendency of Reuben's timidity makes his seemingly sincere redemption almost worthless. Because when he sacrificed his son, his alter ego, half unconsciously, he seemed to "have fallen asleep over him".